

神が『約束の場所』を空に拵えたと宣言してからもう三十年になる。

その間に人類は背中に括り付けるタイプの小型ロケットを発明し、みなして空へと舞い上がった。ロケットが普及した頃といったらそれはひどい有り様で、昼夜を問わず人の迷惑かえりみず誰もが『約束の場所』を探して飛び回っていたという。当然のように事故や諍いが多発し、それを憂えた政府はロケットの使用時間を夜の九時から十一時までに制限する法律を施行した。すると、事故の数は減ったものの人々は指定された二時間を使い切らねばとやっきになった。

今では八時半になるとそこかしこの家々からロケットを背負った人々が現れ、九時の鐘がなるや我先にと飛び上がり、十一時までの間、夜空はラッシュアワーの様相を呈している。

僕達は町を見下ろす丘の中腹に寝転んで、ロケットがひっきりなしに飛び交う夜空を見上げている。今日も昼間から雲一つない晴天。群青色の夜空は、ロケットの炎を間引きさえすれば、星々の煌めきに彩られてなかなか壮観だ。

「ねえ、睦月。あそこの明るい星、見える？」如月が中天を指差して言う。

僕は黙って頷く。無数の炎が邪魔をして、空は少し見え辛い。

「あれとその真下と隣の二つを合わせると横向きの台形ができるでしょう」

「うん」

「それでね、反対側の二つも合わせると台形が頭くつつけたような形になるの。青い蝶ついでう星座よ」

「それ、誰が考えたの」

「私」如月は得意げに微笑んだ。

「よくやるなあ。大体青って」

「あの形を見つけた時ね、まだ日が暮れたくらいの間で、空が暗くなりきってなかった。それで青く見えたから青い蝶つて名付けたのよ」

「そっか」

少し感心した。如月の目には青い蝶が見えるんだ。

「如月はちよつとすごいね」

「ありがとう。まだ休んで行く？」

「うん、十一時まで寝てから飛ぶ」

しばしの沈黙。世界はエンジン音で騒々しいけど、ここだけは静謐な空気になる。如月は沈

黙を許してくれる唯一の女の子で、僕はいつも彼女に甘えている。

無意識に視線を動かすと、そこかしこでロケット同士がかち合っている。多分お互いが相手の邪魔をして、喧嘩にでも発展しているんだろう。心底馬鹿らしいと思う。今や空は空よりも人の占める割合の方が大きいくらいだ。誰もが『約束の場所』を探して燃料と時間の無駄使いを繰り返す。そんな生き方って楽しいんだろうか。少なくとも僕の頭では理解できない。

僕は如月の方を向く。

「如月」

「はい」如月は丁寧に僕の間を見つめ返してくる。

「僕はさ、神とか約束の場所とか、そういうのってどうでもいいんだ」

ただ好きなように空を飛びたいだけ。

最後の部分は口に出さないのでおいた。あんまり言い過ぎて神に目をつけられても嫌だから。

「分かってる。もう寝ていいよ。みんながいなくなったら起こしてあげる」

僕が頷いて目を閉じると、如月はいつものように口笛を吹き始める。口笛のメロディは心地良いうねりとなって僕の耳を包み、ロケットの喧騒を別世界へ追いやってゆく。

## 二

如月は不具だ。左腕の肘から先が切断されて存在しない。これは生まれつきではなく、ロケットの接触事故によるものだ。

もう十年前のことになる。

その当時からして僕は神とか『約束の場所』に興味がなく、同年代の子供達が次々ロケットデビューしてゆくのを他人事としか見ていなかった。危険と騒音が蔓延する世界への第一歩。

一方の如月は他の連中ほどでないにしろ空に興味を持っており、誕生日のプレゼントにと親から買ってもらった子供用のロケットを腰に括って飛び立って行った。最初は親と一緒に、二週目からは一人で。

僕は毎晩、複雑な思いで彼女を見送った。僕も如月と同じようにロケットを手に入れて、空へ上がって行くべきなんじゃないだろうか。そうしないといずれ如月に置いて行かれてしまうのではないだろうか。

でも如月はそんな僕の思いを知ってか知らずかいつも僕と並んでいてくれた。気を遣って空の事を話さないことはなく、だからと言って他の友達みたいに開けっぴろげな話方をするわけでもなかった。彼女はいつも優しく触れてくれて、ロケットを使わない僕のコンプレックスめいたものを緩やかに溶かしてくれた。

しかしロケットを使うようになってからちょうど半年が過ぎたある晩、如月はよそ見をしていた大人のロケットに後ろから轢かれ、そのか細い左腕を半分持って行かれてしまった。僕は

その時の様子を今でも鮮明に思い出すことができる。如月のつけたロケットが放つ橙色の炎。それに向かつて我が物顔に突進する赤黒い炎。僕は思い切り如月の名を呼んだけど遥か上空まで届くはずもなく、彼女を支えるロケットはくるくると螺旋を描きながら四天川のほとりへ落下して行った。

如月の腕が見つかったのは翌日の朝だったから、再び元に戻すなんてことは神にだって不可能だった。

「睦月」

如月の声で目を覚ます。気がつけば慌ただしいロケットの炎は嘘のように消え失せ、代わって静寂と柔らかな星の光が空を覆っていた。

「十一時ちよつと過ぎちゃったけど、みんないなくなつてからって言ったし、睦月、気持ち良さそうに眠つてたから」如月は言い訳するような口調で続けた。

「ううん、その方が嬉しいよ」

「良かった」

如月はほつとしたように微笑んだ。彼女の笑顔は風に舞う粉雪みたいで、いつも触れたら消えてしまいそうな儚さをたたえている。

「それじゃちよつと飛んでくる。すぐ戻るから」

「ゆっくり行つてらっしゃい」

僕は如月に見送られて人々が引けた空に舞い上がる。両手を操縦桿に添えて軽く握り込めば、重力から解放されるなんてペットボトルの蓋を開けるくらい簡単だ。僕の身体は見る間に如月が手を振っている丘から離れ、町を挟んで向かいにある山々の稜線を超えて行く。邪魔なロケットのいない夜空はプラネタリウムをそのまま大きくしたドームのようだ。星は本当にチカチカと瞬いて遥か昔の光を僕に見せてくれる。

如月が退院する頃、僕は彼女の代わりに空へ上がることを決めた。でも事故だらけの無様な空間になんか行きたくなかつたから、夜十一時を過ぎても飛べる特別なロケットが必要だった。暗い空に同化する群青色の炎をターボライターみたいに小さく放ち、サイレンサーも完璧なステルスロケット。

とは言え、つてもお金もないただの子供だった僕は、その辺りの大人に相談するわけにも行かず散々困り果てた。

そんな時ロケット工学の権威として地元大学の教授がテレビ出演しているのを見て、研究室を訪ねて行ったら話を聞いてもらうまでもなく追い返された。当然と言えば当然かもしれない。それでも諦めきれずに研究室の扉の前で立ち尽くしていた僕を見るに見かねて自室に入れてくれた人がいた。僕の救世主となる、先生との出会いだった。

先生は事の次第を聞いて、色々迷ったすえ僕に協力することを承諾してくれた。研究分野がロケットの消音化、消炎化だったのが渡りに船だったらしい。試作品のテストケースになるという危険な任務につくことを条件に、僕は望み通りのロケットを手に入れた。それから度重なるバージョンアップとレポート提出と口頭試問を繰り返して現在に至っている。

丁度良い高さまで上がって如月の姿を見下ろす。もう手は振っていないけど、視線はちゃんと感じる事ができる。どんなに見えず聞えずの工夫をしたって如月は僕を捕捉してくれている。そして僕も、遙か上空からでも如月の姿を闇の中に見ることが出来る。彼女の放つ温かな感触。丘の斜面にぼつと小さな光が灯っているようだ。

間もなくして『約束の場所』が僕の前に姿を現す。もう何度見つけたことか知れない。これを探し当てるのは至極簡単で、ただ望まなければいい。神は『約束の場所』を求めない者にそれを差し出す。そう考えると、ロケットを生み出した辺りからして人間はそもそも『約束の場所』に行き当たらない運命だったのかもしれない。皮肉なものだと思う。

神が空の裂け目の向こうからまた手招きをしている。お前、意地を張るのはいい加減やめて、早くこっち側へおいでなさい。

大きなお世話だ。そんなものには興味がないというのに、神はおかまいなしに誘いをかけてくる。厚かましいにも程がある。

僕は澀のような怒りを感じつつ、神に背を向ける。

如月に一度だけこの話をしたことがある。つい最近のことだ。『約束の場所』は初めて飛んだ時から見えていたけど、僕は長い間、彼女の反応が怖くて話せなかった。もしも如月が『約束の場所』を肯定したら、神の元へ行って構わないなんて言われたらどうしよう。

大人や友達に話せば、常識から言っけとそんな返事が返ってくるに違いない。もしくは自分をそこへ連れて行けと。ただ、如月だけはそうであって欲しくなかった。だからこそ、怖かった。

僕が恐る恐る話すと、彼女は訊き返した。

「睦月は行くつもり？」

「行かないよ。行きたくもない」

「そう」

そして一呼吸。僕の心臓はロケットの内燃機関よろしく恐ろしい速さで脈打った。

「良かった。私、睦月に置いて行かれたくないもの」

置いて行ったりしない。そう言おうとして、涙がこぼれそうになるのをこらえた。もっと早く言えば良かったと後悔もした。

如月は僕と同じ思いを抱いてくれたのだ。

『約束の場所』を離れ、如月が言っていた青い蝶の形をなぞるように飛んでみる。如月は気付いてくれるだろうか。いや、それは無意味な疑問だ。如月の目に映らない僕など一つもない。一通りの自由飛行を終えて更に高度を上げる。冷えた空気が襟元の隙間をすり抜けて肌が届くくらいの高さまで。それからエンジンを切って自由落下を開始する。僕を支えていた二本の火柱が消え、身体が一瞬トランポリンから跳ね上げられたようになる。次いで重力の両手が僕を捕えて町へと引き戻し始める。ゆっくりとした降下から加速度がついて落下と呼べるスピードになるまで数秒とかわらない。薄手の上着がバタバタと風になびいて肌に張り付く。既に乱れていた髪は底のない天井を向いて立ち上がり小刻みに揺れる。僕は奈落へ身を投げる感覚に酔いしれた。

高度が山の頂上辺りまで下がったところで安全装置が働き、ロケットが自動的に点火した。それに続いてジャイロが角度を感知し、立ち上がった格好になるようロケットを調整する。お遊びの時間は終わりだと言わんばかりの強引さで僕の身体はたちまち宙空に固定された。さすがに政府公認レベルの安全装置だけあって、素晴らしく手際がいい。試してみたことはないけれど、他人のロケットとぶつかりそうになった時も寸前で止めてくれるのだという。だから今は、事故とは言っても止まった拍子に勢いで手足がぶつかってしまう程度で、本当に人が死んだりすることはほとんどあり得ない。

この安全装置は如月の事故を教訓に作られたらしい。如月が左腕を失ってから半年も経たないうちに、全てのロケットに対して装着が義務づけられた。

だったらもっと早く作れよ。

神だって同じだ。奴が余計な事さえ言わなければ誰も事故を起こさなかったし如月だって障害者になる必要はなかったに違いない。

だけど、僕が今から三十年前にタイムスリップして神の口を塞ぐ訳には行かないし、子供の頃に戻ってロケット事故の危険性を訴えることだって出来ない。だから僕は思わず叫びたくなくなる衝動を何回も、何十回も飲み込んで来た。あいつらが悪いなんて言っても如月が悲しむだけだし、失われたものだって戻っては来ないのだ。

僕は再び地上を見下ろした。夜中の丘に温かい花が一輪咲いている。十年前は見送る立場だったのが、今は逆になっている。でも多分、如月も僕の姿を見て十年前の僕と同じ思いでいてくれるに違いない。僕はいつも一緒に飛んでいる。如月が見たものは僕にも見えるし、僕が味わった感覚も彼女に伝わっている。如月はもうロケットを操れないけど、僕を通じて空を飛ぶことはできる。

いつか二人で一緒に飛べるロケットが出来たらいい。そしたら全てを許して新しい人生が始まるかも知れない。

僕はそんなことを考えながら、如月の待つ丘へゆっくりと降りて行く。

「ただいま」

僕は丘の斜面にそろそろと着地する。ロケットから吐き出された風が雑草を吹き散らかして二つの小さな円を描く。

「おかえりなさい」

如月は、いつもの静かな笑顔で僕を迎えてくれた。その声を聞くと、まるで飛び立ってから一瞬すら過ぎていないような気持ちになる。

「今日は早かったね」

「うん、上はちよつと寒かったから早めに切り上げてきた。こっちはまだ暖かいね」

「そうね。風もないし、一晩こうしてもいいくらい」

「じゃ、今日はここに泊まるうか」

「何かする気なんでしょう」

「まさか」

如月は鈴を転がしたような可愛い笑い声を上げ、右手を僕に差し出す。

「手、冷えてない？」

草むらにさつきとロケットを放り出すと、差し出された手をとった。冬の暖炉みたいな如月の右手。

「片手だけでごめんなさいね」

「それじゃ右手はここで」

ニヤニヤ笑いをこらえて首筋に空いた手を添えてやる。同時に如月はきやつと小さく悲鳴を上げて飛び退いた。

「首筋は弱いつて何度も言ってるじゃない。右手も後で温めてあげるから」

、それを聞いて大人しく引き下がる。いつもと変わらないやり取り。

丘に沈黙が戻り、僕は如月と並んで何も無い空間を見上げた。眠りについた世界で、手を繋いだ僕達だけが異質な存在のように感じられる。そして、いつからこうして手を繋いでいたのかと、答えの分かっている疑問を今日も思い出す。

僕と如月の根源を見出すには、それこそ生まれた時まで遡らなければならない。

僕達の親同士は元々友達で、家も近く、僕達を抜きにしても仲良く付き合っていた。年齢もほぼ同じで趣味も似ていて休みもよく被る。こういう事ってあまりないらしい。そして、母親が妊娠した時期も一緒だった。親達は、ここまで来ると気持ち悪いなんて笑い合っていたという。僕は親同士の縁じゃなくて僕と如月の縁だと今でも信じているのだけど。

「もちろんと言うか何と言うか、母親二人が病院に運び込まれたタイミングもほぼ同時だった。僕の母親がやっと着いたという時に、すぐ後ろから如月の母親を乗せた救急車が到着したと何度も聞かされている。それから何時間か過ぎてまず僕が生まれ、間もなくして如月も産声を上げた。十六年前の一月から二月にかかる、ちよつとした事件。」

僕は十二時を回る寸前に生まれ、月変わりの鐘が鳴り終わる頃に彼女が生まれた。親達はそれに何かの運命を感じたのかもしれない。僕は一月の睦月と名付けられ、如月の名前も二月になぞらえる形になった。もしも順番が逆だったら僕が如月で如月が睦月だったのだろう。では、どちらも同じ月に生まれていたら？

そうだとしたら、きっと何も関連性のない名前をそれぞれ勝手に付けられていたに違いない。それで僕は、このタイミングをとっても幸運だと思っている。そして如月も。小学生の頃だったか、よく茶化されていた時期、その事を聞いてみたら、当然という顔をして彼女は答えたものだ。

「嬉しいに決まってるじゃない。睦月は嫌？」

嫌な訳がない。

僕は如月が生まれる声を聞いた途端に泣き止み、引き合わせられるや思い切り手を伸ばして彼女の柔らかな手をとったのだという。

「睦月？」

僕は現実に引き戻される。

「何か考え事してた？」

「うん、ちよつと。僕達の歴史について」

如月は笑った。

「考え始めたら十六年かかるわ」

つられて僕も笑う。

「生まれた時のことだけだよ」

「ああ、睦月が私の手を引いてどこかへ連れて行こうとした話」

「うん、多分空」

「うそばかり」

僕達は再び空に目をやる。如月の顔には屈託のない笑みが浮かんでいる。でも、その奥底に、指先に刺さった棘のように小さく張り付いた陰を僕は見逃すことができない。

如月の笑顔に陰が降りたのは、やはり左腕を失ったあの事故からだ。

四天川の河川敷に奇跡的に軟着陸した如月は、すぐさま駆けつけた救急車に乗せられ救急病院へ運ばれた。僕はその場に居合わせなかったけど、話を聞いた限りでは出血量が多めに多

くて命すら危険な状態だったらしい。きりもみの遠心力で通常考えられないほどの血が吹き出したのだとか。吹き出した血は文字通り血の雨となって町の一角に降り注ぎ、次の朝、近隣の住民を驚かせたという話だ。

輸血用の血が足りないとか漫画みたいなミスは起こらなかったから、幸い如月は命を落とすことなく翌日の朝には意識を回復した。その後三日間高熱にうなされ、傷口が化膿して何本もの注射を打たれ、やっと落ちていたかと思えば片腕をなくしたショックに襲われ、それでも何とか治療とりハビリを強固な意志でやり通し、長い時間をかけて世界に復帰した。

面会が許されるようになると僕は毎日彼女を見舞った。片腕の残りを包帯でぐるぐる巻きにされ無事な方の腕に点滴を打たれた如月の目は、死んだ人間を思わせる、ぞっとするような静けさを内包していた。友達はみんな一度だけ見舞いに訪れ、ほぼ例外なく如月の様子に血の気を引かせてすぐに引き返し、二度とやって来なかった。両親を除けば僕だけが彼女の隣に座り続けた。

日常生活へ戻ると共に、少しずつ生氣が如月の身体へ戻り始めた。それは複雑なタペストリーを織るように長く、根気のいる、しかし確かな手応えを感じられる過程だった。如月は学校に復帰して三ヶ月もするとぼつと見は元の姿を取り戻したようになり、半年、一年と経つにつれて事故で負った心の傷も塞がって行くように見えた。時折恐ろしいフラッシュバックにさいなまれ、道路を歩いている最中突然後ろを振り返るようなこともあったけど、彼女は一步步つ着実に自分の欠片を取り戻して行った。

しかし、全ての欠片を再び手に入れることは決して叶わなかった。何しろ彼女の左腕は吹き飛んでしまったわけだし、再び空へ上がれる希望もほぼ完全になくなってしまったのだ。医者には義手の装着を強く勧めたらしい。当然の判断だと思う。でも、如月は頑としてこの申し出をはねつけた。その理由は僕も聞かされていない。もしかすると代わりの義手など付けてしまつたら本当に腕が殺されてしまうと感じたからかもしれない。そうだとすれば、彼女は自分を保つために完全な不具の道を選んだことになる。それが潔い決断だったのかどうか、僕には分からない。

陰の原因は外部にもあった。社会に戻れば彼女を健常者と呼ぶことはできず、周りの人間は例外なくそれを意識した。同じクラスの連中は普通に振る舞っているように見えても、必ずどこかしら別の人間を見るような視線を向けてきた。如月の鋭敏な感性がそれを捉えなかったはずはない。そして、直接関わりのない人間は更に残酷な真似をした。校庭に出れば下級生が遠慮なく如月の失われた腕をじろじろと見てきたし、時には「手無し」と呼ぶ声すら聞えた。僕はそうする奴らを全員引きずり出して二度と逆らえなくなるまで張り倒してすり潰して嫌というほど謝らせたかった。でも、根本的な解決には繋がらないと分かっていたからそうはせず、ただ如月の手を握りしめるだけだった。片一方だけ残された小さな手は、時に耐えがたい辛さを表現するかのようになり、小刻みに震えていた。

一度だけ耐えきれなかったことがある。学校の帰り、すれ違った酔っぱらいが如月を「片輪」と呼び、突き飛ばしてきた時だ。僕の手は考えるより先にそいつのたるんだ頬を殴り飛ばしていた。

と同時に如月が僕に力一杯抱きついてきて、一言「やめて」とつぶやいた。彼女は冬の底に  
いるみたいに大きく震えて、それでも僕を止めようと必死に身体を投げ出していた。情けなさ  
で涙が出そうだった。僕は僕の怒りを満足させるためだけに愚かな真似をしでかし、そして彼  
女はそれを知りながら、か細い身体にどれだけ残されているか分からないエネルギーを使っ  
て、僕を彼女の元へ引き戻してくれたのだ。

それが三年と少し前。

現在。

僕達は相変わらず丘の中腹に肩を並べて座っている。夜も更けたこんな時間にわざわざ丘を  
登ってくる人はいない。家々の明かりはほとんど消え去って、時折自動車のエンジン音が空気  
を伝って運ばれてくる以外に物音はほとんどしない。鳥も虫も寝静まっているように感じる。  
今や僕達のものになった濃紺の天井は、神の気配すら消え去ってただそこに佇んでいる。口  
ケットのいない完璧な夜空。

優しく包まれた左手が少しずつ熱を帯びてきて、手の平に汗がにじみそうになるので僕はさ  
りげなさを装って軽く手を引き戻す。すると如月は僕の真意を理解したのか、小さく笑って手  
の甲に軽く触れてくる。何だかむずがゆくなるような温かさを感じて僕の心は落ち着きを失  
い、彼女から少し離れるべきかそれともつと近くに寄るべきなのか分からなくなって結局何  
も出来なくなる。如月はどうなのだろう。表向きは清流のように淀みなく接してくれているけ  
ど、その静けさの向こうに何かあるのか僕はまだ知らない。

「如月の手は温かいね」思いあまって口に出した。

「そう?」

「うん、何だかいつも」

「それじゃ、夏は手、つながない方がいいかもね」

「いや、そうでもない」

如月は笑って手を離し、上着のポケットから小石大の機械を取り出した。中心部が炭火みた  
いな光を放っている。指先で触れてみると、思った以上に温かかった。

「分子振動式のカイロ。睦月が空を飛んでる間はずっと握ってるの。それで温まったのを半分  
分けてるだけ」

そう言って僕にカイロを手渡す。握りしめるとその中心からかすかな震えが伝わってきて、  
それがやがて手一杯に広がり僕の芯に小さな火をつける。手の平から指先へ、手首から二の腕  
へ、震動は段々と広がって、僕がカイロを包んでいるのかそれともカイロにくるまれているの

か区別がつかなくなる。

「温かいね」

「冬の知恵」

そう言えば、もう冬が近い。

「でも」と、僕は続ける。「如月の手が温かいのはさ、多分、これのせいじゃないと思うんだ。もっと別の、如月の中から何か伝ってくるような感じ」

自分で言っていて気恥ずかしくなり、少しうつむいた。時々柄にもない事を言ってしまうのは悪い癖だと思う。頬が熱を帯びて来るのが手にとるようにわかる。ちらりと横目で見ると、如月は珍しくきよとんとした表情で僕を見返して来る。滅多に驚かない彼女のこと、よっぽど意外な発言に聞えたに違いない。

それから如月は吹き出すように笑った。こういうのもあまりない。

「ごめんなさい」

「ん、別にいいよ。僕もちよつと照れくさい」

「睦月はあまりそういう風に考えないって思ってたの。ロケットを見ている時なんか、いつも皮肉るような感じだから」

「好き嫌い激しい方なんだ」

「そうね」

如月は一息ついた。何かを考えているか、言いあぐねているような表情が僕の胸を打つ。それから再び僕の手をとって、言った。

「でも嬉しい。時々言ってるね、そういうの」

「たまにね」答える声が小さくすばまって、宵闇の向こうに四散した。

風が一陣吹いて、遠くに見える四天川の水面を撫でる。蛇行する暗闇にかすかな波が立つ。山肌に散在する木々の葉が一斉にさえぎって、眠った町の空気を震わせる。それに呼応するかのように、大通りからクラクションの音が鳴り響いた。

如月がふと、僕の左手に重ねていた手を離れた。怪訝に思っただけ振り向くと、腕を軽く挙げて何かを欲しがるような素振りを見せる。

ああ、カイロ。

そう思っただけ手渡そうとしたら、今度は如月が怪訝そうな顔をして首を傾げた。僕達の間立つ沈黙が一瞬姿を変えた。

「あ、カイロ」僕は言い訳くさい口調で言う。如月は首を傾げたまま。完璧に的外れな答えを言ってしまった気まずさが僕の身体を包む。

「睦月、違うの。右手」

「右手？」

「あとで温めてあげるって言ったでしょ？」

耳が熱くなった。ここが暗がりです。本当に良かったと思う。如月の言葉に何一つてらいが見て取れないのも、また照れを倍増させる。

先にカイロを返して遠慮がちに右手を差し出すと、如月は何を思ったのか、掴んだ手をそのままそつと胸元に引き寄せた。手の平にニットとその奥の感触が伝わって、引きつけを起こしたように右腕が跳ねる。それも予期していたのか、如月は全く動じることなく僕の手を握ったまま静かに息を吐く。十六年間生きてきて初めての出来事だった。

「如月？」

答えはなかった。よく見ると、如月の目は静かに閉じられていた。火照った手の平を通して乱れない呼吸が伝わってくる。目を閉じれば心臓の鼓動まで聴き取れる。彼女の心臓は、頼りなげな身体から想像できないほどしっかりと脈打って、失われた腕、残された四肢の先へと命の断片を送り込んでいる。その脈動を感じとって、僕の動揺も少しづつ引いて行く。

耳から血の気が抜けるのを待って、半歩だけ如月の傍に寄り添った。何となく、距離を縮めるのがいいような気がした。十六年間続いてきた自然な距離感に少しだけ手を入れる。それは不自然でもなんでもなくて、ただその時が来たからそうするという、元から定められていた行為のように思えた。

僕に合わせてかすかに手を握る力を強めてから、如月も僕に近づいてくれる。そして僕の肩に寄りかかって小さく息を吐いた。やつと自分の居場所に帰ってきたような、深い安堵のため息だった。

でも、やつと生まれたその平安は、長くは続かなかつた。

身体を寄せ合ってから五分も経った頃だろうか、如月の手に小さな震えが走った。危険な兆候を僕は見逃さず、すぐさま繋いだ手に力を込める。しかし一度始まった震えは間断なく続いて、収まるどころか輪郭をはつきりさせ始める。胸の上下が不規則になり、鼓動が確かさを失って行く。

たまらなくなつて目を開けた時にはもう、如月の全身は一見してそれと分かるくらいはつきりと震えていた。その顔に普段見せている大人びた余裕はなく、代わって苦悩の色が一面を覆っていた。僕はどうするべきか迷った挙げ句、ただ一つの抛り所である右手に更に意思を込め、空いた手で背中をさすった。背中は冬枯れの野原みたいに冷えきっていた。

やがて涙が一筋頬を伝い、如月は声を立てずに泣き始めた。呼吸の音がかすれ、吐き出される息は温みと雨の気配を帯びて僕の芯を揺り動かす。

僕は如月が泣くのを初めて見た。

そう。如月は泣かない女の子だった。正確に言えば人に涙を見せない女の子だった。これは僕だけでなく如月の両親も泣いた所を見たことがないと言っていたから、多分事実だと思う。

彼女はお気に入りの人形をなくした時も、山に入って迷子になった時も、飼っていた犬が死

んでしまった時も、辛そうな表情を見せることはあれ、決して泣くまでは至らなかった。出血多量で命を落としかけたあの夜だって、手術室に運ばれる間、痛みと衝撃で動転しながら、両親と僕に向かって微笑んですら見せたのだ。

だからと言って、それは彼女が泣かない強さを持った人間であることを意味するわけじゃない。誰にだって人に泣き顔を見せる権利は平等に持っている。仮に無限の強さを備えた人間であつても、一度や二度は人の前で泣いていいし、そうするべきだ。

僕はそんな簡単なことすら今の今まで気付かずしていた。もしかしたら、気付かなかったのではなく、揺らぎのない側面ばかりを見ることで目を背けていたのかもしれない。

如月が誰にも知られず一人涙を流し続けていたこと。誰の目にも触れず、泣き声を上げてもどこにも届かない場所に身を隠して泣いていたということ。僕の知らない所で泣いている小さな如月。

何が原因なのかは知らない。生まれつきそうだったのかもしれない。ただ確かなのは、如月が長い時を過ごす中、泣き顔を隠してきたことだった。

今や僕はその全てを知ってしまったている。如月の胸に収まろうとして収まりきらず、行き場を見失った暗い水たまりの存在。四天川の川底よりも深いそれは、とうとう胸を食い破って僕の前に姿を現している。

涙が肩に触れ、ゆつくりとコートの生地に染み込んでくる。僕が一瞬身体を震わすと、彼女の手に一層力が込められる。僕は触れること以外何もできなかった。発するべき言葉も、正しい具合に肩を抱き寄せる余裕も、涙を全て飲み込んでやれる力も、何一つ持ち合わせていなかった。ただ泣いてはいけない、震えてはいけないと自分に言い聞かせて、彼女と手を繋ぎ続けていた。本当に繋がっているのかも分からないままに。

どれだけの時間が流れたのかは覚えていない。五分か三十分か、あるいは一時間近かったかも知れない。不意に如月は泣くのをやめ、ゆつくりと顔を起こし僕の目を見た。瞼は腫れ、瞳は充血して病の色をたたえていた。その赤く染まった水晶の奥に、すぎるような光が垣間見えた。

「……かないで」

「え？」

間隙。如月は目元を拭ってから再び口を開く。

「置いて行かないで」

「行かないよ」僕は慌てて答えた。「どこも行かない」

「うそ」如月は断言する。目尻に再び涙が浮く。

「うそよ。睦月がロケットの火を消して落ちてくるの、いつも見えてるんだから」

「あれは」

「一人で飛び降りて、いつか私の届かない所に行っちゃうってずっと思ってた。私はもう空を飛べないから陸月には追いつけないんだって。違うの？」

否定しようとして、一つも言葉が出て来なかった。そうじゃないと言い切れたらどんなに楽だったろう。でも、どこかにそうである部分がある部分を僕は持っていた。わざわざロケットのエンジンを切って五百フィートの空中から落ちて行くことに快感以外の何かがあったとは言いい切れない。そして、如月の瞳は嘘を許してはくれない。

視線だけは辛うじて外さずに、正解が現れるのをじっと待った。三日月が雲に隠れて斜面に影を落とす。沈黙が落ち着かない重みを帯びて、僕に答えを急がせる。如月も辛抱強くこの瞬間にふさわしい答えを待っている。

いくら考えても正解は見つからなかった。それはきつと、正解なんてものが存在しなかったからだと思う。如月の古傷を知らず知らずのうちに何度も抉って最後には骨の髄まで切り裂いてしまった僕に、持ち出して来られる言葉なんて存在しない。無意識に人を殺した人間が、相手に向かって何を言ってるというのだろう。

だから僕は、別の道を選ぶ。開いてしまった傷口を縫い付けることはやめて、僕自身の手で傷を塞ぐことに決めた。

雲が早足に通り過ぎるのを待って、僕は繋いだ手を足元に下ろした。如月の眉が不安げに歪む。乾ききらない涙の跡が、薄く輝いてとても儂げに見える。

ごめん。

真っ先に言うべき台詞は頭に押し込めて、少し居住まいを正してから、僕は努めて真面目な口調で問い掛けた。

「如月」

「何？」かすかに期待の込められた声音。

何も言わず、握りしめた左手を一旦離して頬へ移した。如月の身体が一瞬震える。涙の感触でひるみそうになる身体を何とか鎮め、ありったけの勇気を振り絞って彼女を引き寄せると、月明かりに照らされた如月の表情が見たこともない形に固まった。呆れているとも笑っているとも泣いているともとれる顔だった。物心ついてから一度の泣き顔も見せて来なかった彼女が、初めて出会う場面でこんなことになって、一体どう感じるのか。そんなことは先走った僕ですら想像がつかない。

それでも間違いではないという確信だけは頑として動かなかった。僕が如月に踏み込み、辛さを引き出して分かち合う。誤魔化しでしかないかもしれないけど、それ以外に方法は思いつかなかった。

次の瞬間、如月が手を離して地面についたかと思うと、気付かないほどの素早さで臉を下ろし顔を近づけてきた。そのことに神経が反応するより早く唇が触れ合った。僕は何が起こったのか分からなくなって、混乱したままとにかく目を閉じることにした。それから唇へ意識を移

す。如月の唇は涙を含み、冷たく湿っていた。

しばらくそのまま唇を重ねた後、彼女は僕の身体に思い切り体重をかけて草むらに押し倒した。勢いで歯がぶつかって少し痛い。僕から動くつもりが、結局如月にリードされている。でも、唇を伝って涙の味が口の中に流れ込んで来た瞬間、彼女の支えになることを許されたような気がした。

再び目を開けると、すぐ真上にささやくような笑顔があった。月を背にして微笑む如月の姿から、少しだけだけ儂さが薄れていた。

「睦月」

僕の名前を呼ぶ声にさつきまでの悲壮感はない。

「馬鹿ね、遠慮なんかしないの。ずっと待っていたんだから」

#### 四

一週間が過ぎた。僕達の関係は相変わらずというところで、あの夜のおかげで何かが築かれたとか、逆に崩れ去ったとか、目に見える類の変化はない。天気が良ければ毎晩二人で丘に登り、ロケットの空を眺め、十一時になったら僕は一人で空へ行く。『約束の場所』も諦め悪く出現し続けているし、地上に戻れば如月が手を温めてくれる。

だからと言って全てが以前と同じリズムに乗って動いている訳でもない。

僕は最後の締めである自由落下をきっぱりやめた。理由はもちろん如月が傷つくと知ったからだ。正直あの気持ち良さを手放すのはちょっとだけ惜しい部分もあったけど、如月の涙とは、わざわざ比べるまでもない。それにどうせ冬も近づいている。冷え込んで来たらとてもじゃないけど落ちようなんて思わない。止めるにはいい頃合いだったとも言える。

僕の選択は如月にも悪くない影響を及ぼしていたと思う。その証拠に、ずっと笑顔にかかっていた薄い皮膚が和らぎ始め、代わって子供っぽさやちょっとした空隙が顔を覗かせるようになった。それが僕に泣き顔を見せて言いたい事を口にしたおかげか、もしくは心配事がなくなったからか、実際の所は分からない。多分全てが絡んでいるのだと思う。とにかく如月の陰りが少しでも薄れたのは嬉しい。

週中のニュースで心身障害者のロケット使用を認める法令が施行されたことを知った。今までは一部の身体障害者と共にロケットで飛ぶことを禁じられていた心身障害者達が、この法令によって新たに空を飛べるようになった。同時に、ロケットの安全基準を一段引き上げるのも決まったらしい。一メートル以内他人が近づくと緊急停止していたのを二メートル以内に広げるとか。

ニュースのコメンテーターはバリアフリーとか平等主義とか色々前向きなことを言っていたけど、本当はどうなんだろう。僕は、ただ空の混乱が大きくなるだけのような気がしてならな

かった。現状ですら九時から十一時はどこもかしこも渋滞しているというのに、そこへ心身障害者を入れたらどれだけの惨状になるのか誰も想像しなかったのかと聞いてみたくなる。突然「レーダーとジャイロが反応し、勢いで腰を痛めたり首を違えたりする可哀想な人達が増えるだろう。そのくらい承知で飛び回っているんだから怪我の一つや二つで文句を言うのはお門違いとも言える。でも、だからって平等主義を振りかざして飽和状態の夜空に拍車をかけるのが良い判断だとはどうしても思えなかった。

僕は自分さえ良ければあとはどうでもいい冷血漢なんだろうか？

「そうとも言えるしそうでないとも言える」

先生はコーヒーを一口飲んで、苦味に眉根を寄せつつそう言った。

「ブラックは慣れないな」

「砂糖入れたらいいのに」

「砂糖も買えないくらい貧乏なんだよ」

「何で？」

「ロケットに金つきこみすぎたから」

先生との付き合いも、もう十年近くになる。

僕用のロケットを作るようになった当時は肩書きもない研究員だったのに、今では学部筆頭の准教授にまでなっている。常にやる気がなさそうな割に、腕はいいと思う。何しろ僕は十年間で一度も故障らしい故障に遭った試しがないのだから。

書面に出来ない契約を交わす際先生がまず命じたのは、とにかく他の誰にも機密を漏らさないようにとの箝口令だった。それは時間外のロケット使用が法律に触れるのと、それに自分が手を貸したことを知られれば即学界追放になるからだ。最悪捕まったとしても自分のことは絶対に口を割るなど十回以上言われたような気がする。そして、色々脅し文句を並べて僕が心の底から震え上がった上で首を縦に振ったのを見て、先生はステルスロケットの製作を承諾してくれた。厳かに製作開始を宣言しつつ、口元が楽しげに歪んでいたのをよく覚えている。丁度いい被験者だとか喜んでいたような気がする。

最初は自分のことしか考えていないように見える先生をもうひとつ信用出来なかったけど、今になってみるとそういう人で良かったと思う。他人がどうこうというよりも自分のために行動している方が理にかなっているような気がするし、中途半端さもない。それに僕だって自分のために動いているのであって如月に行動理由を押し付けるつもりなんてなかったから、おあいこだ。僕用に編み出した技術を転用して研究や論文に役立てているという話も利害一致の感があっていい。ちよつとした共犯者の気分。

「そんなに予算オーバーしてるの？」少し申し訳なくなつて尋ねる。

先生は僕の弱り具合に気付いておかしそうに手を振った。

「冗談冗談。大方研究費で賄えてるよ」

「大方？」

「細かい所までこだわろうとすると、どうしても足が出る。そしたら自腹切るしかないさ」

「そんな無理しなくてもいいのに」

「無理？」と言いつつコーヒーをもう一口すすって顔を軽くしかめてから、先生は椅子ごとこちらを向いた。表情は曖昧なままだけど、目が少し座っていた。

「無理って表現は適切じゃないな。まあ自分の貯蓄まで研究に使ってるんだから無理って言われても仕方ないか。ただ、自分で始めた物作りってのは、結局のところ徹底的に納得が行くまで続けるしかないもんなんだよ。君も本気で物を作る事になったら分かるだろう。徹底的にってのは、例えばDの冷却ファンをマイクロメートル単位まで調整するとか、誰も見ない家の床下をきれいに磨き上げるとか、他の人間から見たらでんで無意味なことな。だから見方によつては無価値なやり方とも言えるんだけど、作ることに取り憑かれた人間は、突き詰めるとそういう所までこだわらざるを得ない。徹底できなかったら、それをずっと心に抱えたまま生きて行かなきゃいけないからね」

「でも、ほとんどの人はこだわりきらずに作業を終わらせるんだよね。お金とか時間とか、色々制約があるから」

「当たり前。要するにそうやって与えられた枠組みの中でどれだけこだわられるかってのがポイントなわけさ。で、私は納得行かないからちよつとばかり枠組みを広げてやった。代わりに砂糖とミルクといくつかの事を諦めたと」

「先生、誠実な人なのね」

如月が感心そうに天を仰ぐ。

「そういう自分しか見えない所まできちんとして出来る人ってあんまり多くないと思う。大体は言い訳を先に立たせて誤魔化しちゃうんじゃないかしら」

僕は黒く塗られた四天川を見下ろす。無数のロケットから放たれる光が静かな水面を右往左往して、サーチライトで照らされているみたいに見える。空が以前より狭くなったのは気のせいだろうか。

「確かに手抜きとかはしないかな。何ていうか、自分に対して誠実な感じはする」

語尾に終わりの気配がないのを察してか、如月は何かを待つような沈黙を向けてきた。視線は水面へ、耳は僕へ。光の描く曲線にまた新しい星座を重ねているのかも知れない。

僕は少し考えてから二の句を継いだ。

「自分に誠実なら、他人に対しても誠実になれるのかな」

「どうかしら」

「どう思う？」

「わからないわ」

如月は困ったように笑った。僕も釣られて笑顔を返す。すぐ真上を、ノイズ混じりの音を立てながらロケットが通り過ぎて行った。堤防に打ち寄せる波音と近くの浄水施設から絶え間なく流れてくる水の音、地上の夜を構成する粒子は空から切り離されているんじゃないかと思うほどのんびりしていて、川沿いを歩くのもたまにはいいと思わせてくれる。

「ねえ」と如月。僕は無言で振り向く。

「この間話した青い蝶っていう星座。どの星なのか忘れちゃったの。睦月、覚えてない？」

「ううん。忘れた」

「上の空だったもんね」

すねた口調でそう言うので、僕は適当な星を指差して夜空に青い蝶を描く。

「デネブのちよつと南東あたりの明るいやつ。あそこからとかげ座の方に線を引いたら台形っぽくなるよ。それを反対の小さいのと合わせたら青い蝶」

如月は検分するように眺めてから「そうかも」と一言つぶやいた。

「私もね、気違い法はどうかと思ってるんだ」

先生はうんざり気に言う。

「その言い方はまずいんじゃない？」

「ああ、いや。私の言う気違いってのはそっちの方じゃなくてね。立てた側のことさ」

「議会のこと？」

「まあ、そうだ。あんなもの通したらどうなるのか想像がつくはずなんだけどね」

「もう結構大変なことになってる」

それを聞いて先生は面白そうに口元を歪める。

「楽しみにしておきな。もつとすごい事が起こるよ」

「例えば？」

「『約束の場所』が見つかるのさ」

「本当かなあ」

「先生がそう言うのなら、本当かもしれないね」

ロケットを背負った子供が河川敷に降りてきて、如月の語尾をかき消した。風圧で草むらに波紋が立つ。子供は夜空を見上げると、再び地べたを蹴って飛び立って行く。彼は多分、どうして『約束の場所』を求めのかなんて考えたこともないだろう。ただ、親から擦り込まれた欲求に従って空を飛び回るだけだ。でも、そうしたところで『約束の場所』が見つかることは

ない。神はもっと無垢な存在を求めている。

僕は一つの事に気がつき、あ、と声を上げる。「つまり、心身障害者の中には『約束の場所』への欲求が全くない人もいて、そういう人なら辿り着けるってことなのかも」

如月の目元が思案気に細められる。僕の言った先を見据えているような表情。この顔を見せる時、彼女はいつも僕より大人の近くにいます。

「『約束の場所』に誰かの手が届いたとするじゃない？ そうしたら、神はどうするのかしら。『約束の場所』を閉じる？ それとも世界にご褒美をくれる？」

その言葉から、ふと先生の言葉を思い出す。確か先生は、枠組みが変わると言っていた。世間ぐるみで知らない振りをしていた事柄が暴かれるとも。

「わからないけど、あまりいい事にはならないんじゃないかな。見た感じ、神が素直に祝福してくれるとは思えない。どっちかって言うと言を張っているみたいに見えるんだ」

「畏？」

「楽園に植えられていた知恵の実のなる木みたいな」

『約束の場所』は、何らかの仕掛けと考えた方が通りがいい。何故なら、人間は何千年も生きてきたというのに、三十年前という半端なタイミングで設置すること自体がおかしいからだ。やっと成熟段階に達したから？ それもおかしい。成熟は多分より多くの欲求を産む。そこに合わせて無欲になれと言うなら、そもそも始めから無欲さを植え付けておくべきだ。あらかじめあるべき姿を設定せず、後から心根を試すような真似をするのは、遊びか畏のどちらかにしか考えられない。それは、僕が『約束の場所』を避けてきた理由の一つでもある。空の裂け目のあちら側に存在する得体の知れない胡散臭さ。

だから神なんか信用できない。

「そう言えば、もう少しで新型が出来るって。先生、嬉しそうに言ってたよ」

「今度はどんなの？」

「それは教えてくれなかった。届くのを待って」

一旦言葉を切ってから、足元の石を拾い上げ四天川に向かって投げる。石は一度も水を切ることなく、歪んだ王冠を作って水底に消えて行く。

「出力上げるとか言ってたから、きつと二人で飛べるやつだよ」

如月はうつすらと微笑んだ。

「そうだといいね」

「そうに決まってる。ずっと頼んできたんだから」

心持ち語気を強めにそう言うと、如月は嬉しそうに僕の手を握る。十一時の鐘が鳴って口ケット達が一斉に動きを止める。理解できないといった様子で飛び回り続けているのは心身障害者の口ケットか。ぎこちない軌道は光を見失った虫を思わせる。

「如月、僕は冷たい奴かな」

「時々ね。でも、私には優しいわ」

「そっか」如月の右手を軽く引く。「それならいいや」

「そうかしら？」

優しい質問には敢えて答えず、僕は半歩だけ先に立って、流れ星みたいに降りてくるロケットの下を歩き出す。

## 五

「あのさ、今日ちょっと一人で上がろうと思う。雨降るかもしれないし。いいかな」

「私はいいけど、天気が悪いなら無理しなくてもいいんじゃない？」

「確かめたいことがあって。人が少なそうな日の方がいいんだ」

「……人のいる時間に飛ぶの？」

「ごめん。訳はあとで話すから」

「ちゃんと教えてね。あと、怪我しないで。風邪もひかないで」

「わかった」

如月の声に心配そうな響きがこもっていたのは無理もない。何しろ十一時前に空を飛ぶなんてほとんど初めてに近いのだから。いくら安全装置があると言っても、ひっきりなしに人が行き交う空間は、安全とは言いがたい。それに、如月は今でもロケットを恐れている。

そんな彼女に不安を持たせると分かっているなお僕を空へと駆り立てたのは、『約束の場所』を見つけた人間がいるという確信だった。

空で人が行方不明になる事件が発生するようになったのは、例の心身障害者法が施行された間もなくのことだ。最初は一人、一週間で三人、一月が過ぎる頃には総被害件数が二桁に到達した。事件はどれも似通っていて、ある高度に達した人間が何の前触れもなくロケットもろとも夜空に溶けてなくなってしまうのだという。目撃者も多く、ニュースでは連日彼らへのインタビューが放送されていた。曰く、頭からかき消えた、消える寸前に笑い声が出た、七色に光った、ガムランみたいにカラコロと音がした。彼らは一様に興奮していて、証言がどこまで正しいのかは何とも言えないところだった。

ただ、一つだけ共通している点がある。行方不明になった人々が例外なく心身障害者ということだ。これは誰の話の話を聞いても同じだし、高校の友達の知り合いも心身障害者が消える所を見たらしい。

コメンテーターとしてワイドショーなんかに出演している専門家達は、どうもその点については語りたがっていない様子だった。誰しも右から左へベルトコンベアみたいに話を流して終わり。先生の上役に当たる、かつて僕を門前払いにした教授も同じで、興味深い共通項だと

言っではいたものの上それ以上突っ込んだ話はせず、いつも何か別の議論に焦点を移してお茶を濁しているようだった。

「報道管制敷かれてるからね」先生は事も無げに言った。

「情報が隠されてるってどういうこと？ どうして？」

「タイミングを窺っているんだ。いつ、どれだけの情報を流せば一番インパクトが少ないか」

「普通は逆だよ」

「そう。隠されている情報が世間の不利益になるってことさ」

言葉を変えれば、行方不明事件の真相が明らかになったとしてもテレビの視聴者はその情報を活用できないということだと思う。だけど、先生が言う通り公開のタイミングを計っているんだとしたら、マスコミや専門家、そして政府も情報を独占することで利益を生むことはできない。だとすれば事実は誰のためにもならない。その上でいつか公開されるということは、事実を知る人達が事を公にしなかったとばれた場合、彼らが責められるからに他ならない。

いつか記者会見か何かで一斉に発表するとして、その時はどうやって決められるんだろう。事件が一段落ついた頃合いを見計らって、ということはない。そういうやり方は事件が収束しそうな状況でとるもので、今回の場合は収まるどころか加速するようにしか見えないからだ。だとすれば、ある程度世間的に予想がついてきた段階だろうか。それなら先生の言ったことともつじつまが合う。

知らない振りをしていた事が暴かれる。つまりみんな薄々感じていたけど敢えて言葉にはせず、尚かついつかは知らなければならぬこと。そして、行方不明事件から導き出されそうな空の情報と言ったら一つしかない。

つまり、心身障害者達の行った先が『約束の場所』なのだ。先生が言った通り、心身障害者が飛び立ったことで『約束の場所』が見つかり、同時にそれを望んでいる人間が決して辿り着けないことが真実として明かされる。

ステルスロケットの存在が世間にばれると困るから、父親に大人用のロケットを借りて曇った空へ駆け上がる。しばらく前から両親は空を飛ぶのをやめていたから機械の調整は今ひとつで、グリップに油が足りなくて握り込むたび少しきしむ。その代わりと言っては何だけど出力は普段使っているやつより大きくて、僕は時折体勢を崩したり他のロケットに近づき過ぎて冷や汗をかく。汗は湿った風に拭き晒されて身体の芯を凍り付かせる。風邪をひかないよう厚着してきたせいで身体の動きも思ったより鈍く、久々の定時飛行はあまり愉快なものにならなかった。

いつも見上げてはいるものの、実際飛び込んでみるとその喧騒に驚かされる。蝶の羽ばたき

を虫の立場で観察したらこんな感じに聞えるのかと言うくらい、ロケットエンジンの排気音は大きい。空を行き交う誰もが轟々とうなりを上げて、暴風の中に取り残された気分になる。よく見るとイヤージュウオーマーやヘッドフォンで耳を塞いでいる人も少なくない。みんなうるさいとは思っているみたいだ。聴覚を遮断してよく事故が起こらないと感心する。飛び続けているうちに背中目が発達するのかもしれない。

如月を跳ね飛ばした空の地獄。

嫌な思考を振り切って慎重に高度を上げてゆくと、逆比例して少しずつ人の数が減っていく。行方不明事件で恐れをなしたに違いない。ある程度の高さからは心身障害者以外にほとんどロケットの影が見えなくなって、火の玉の行き交う海を上から見下ろす形になる。不安にかられて自分の空を制限した人々からは、目的を見失った頼りなさが感じられる。『約束の場所』と行方不明のことも薄々感づいていて、それを認めたくないから空を飛んでいるように見えないこともない。その事実をはっきり言葉にされた時、彼らはどんな受け止め方をするのだろうか。

スピード違反気味のロケットがぶつかりそうになって安全装置が作動した。心身障害者のロケットだった。彼は僕を見ると無邪気な顔に申し訳なさを浮かべて、ごめんなさいと素直に謝って来る。そしてすぐに上空へと軌道を変える。

彼の後を追って視線を動かすと、濃灰色の分厚い雲に行き当たった。降って湧いた煙のような雲はすぐ手が届きそうな高さまで広がっていて、星々の光をシャットアウトしていた。雲というより暗鬱な煙を彷彿とさせる雰囲気。天気予報は半分の確率でにわか雨が降ると言っていたけど、見た感じ七割は軽そうだ。僕は雨具を着て来なかった自分のうかつさを呪った。これでもし本当に降ってきて、風邪でもひいたら如月はどれだけ怒ることか。その様子を想像しただけで首筋に嫌なものが走る。彼女は約束を破ると本当に恐いのだ。

なんてことを思っていたら本当に大粒の雨が降り出した。水滴が細かなバチになって背中ドラムを叩く。雨脚は瞬く間に強まり視界の精度を削り取って行く。にわか雨というよりは夕立に近い勢いだった。ゴーグルは全く用を成さなくなる。コートも水分を吸って急ごしらえのウエイトに姿を変え、僕は電話での軽率な発言を心底後悔した。

再び眼下に意識を移すと、大半のロケットは今夜の飛行を諦めて地上へと帰る準備を始めていた。中には丁寧に傘の花を咲かせる人もいる。時刻はまだ十時を回るか回らないかというところだけど、世間にとっては終わりの鐘がなったも同じに違いない。雨が降ったら探索は終わる。そう考えれば人々の『約束の場所』への渴望は弱まりつつあるのかもしれない。

一方、心身障害者はそんな一般人とは関係ない様子で、むしろ台風を迎える子供のように喜んで上空を飛び回っていた。その姿は微笑ましいと同時に危うくもある。彼らはいくまで空に魅せられているのであって、『約束の場所』への希求は皆無と言っている。だとすればロケットの状態と『約束の場所』を考え合わせた際に現れるはずの心理的ナリミッターがないわけ

だ。あくまで人間が想定しただけの安全装置しかない大空にあって、限界を知らない行動は命に関わる。如月が僕を見て胸を痛めていたのもそれが理由だろう。

歯止めの利かない心身障害者達はいつかどこか遠い場所に行ってしまうかも知れない。これはあまり気持ちのいい想像じゃない。

他人事ながら心配して見ていると、彼らのうち一人の向かった先に、何の前兆もなく『約束の場所』が姿を現した。

雨空の一部に揺らめきが広がったかと思うと空気が色を変える。アメーバのように落ち着きのない形をした門の向こうが『約束の場所』だ。こちらから見るとあくまでも平面的なそこは、絵の具を好き勝手にぶちまけたような混沌。奥で待ち構える神はわざとらしいトーガをまとって子供とも老人とも判別のつかない風貌をしている。その表情は自信と歓喜に満ちていて、今でも僕があちら側に行くことを一つ足りとも疑っていないように見える。ただ、今回のターゲットは僕ではなく心身障害者の男だった。

彼は楽しい玩具を見つけたかのように何の疑念も抱かず『約束の場所』に向かって行く。僕は雨に打たれながらその後を追いかけてようとしてロケットの出力を一旦は上げたものの、すぐに躊躇して上昇をやめる。操縦桿が雨にまみれて手から滑り落ちそうになる。

まず、彼を捕まえたとしてどう説得するべきか分からなかった。それ以前に彼を止める権利が僕にあるとも断言出来なかった。彼が望んで赴くなら好きにすればいいのではないだろうか。家族だって、行方不明の真相が『約束の場所』だと知ったら、喜びこそすれ多分悲しみはしない。ならば僕は止めるのではなく放っておいてやるべきだと理性が見える。

でも、人類的に筋道が通っているからと言って簡単に納得出来るわけじゃない。僕はあんなに傲慢な神の元へ、目の届く限り誰一人やりたくない。神も『約束の場所』も大嫌いだし絶対に認めない。

僕は思い切って操縦桿を握る手に力を込め、今まさにそこへ到達しようとしている男に突進する。安全装置なんて関係ない。リミッターカットの方法は先生に教わっている。慣性飛行に切り替えると一瞬装置の反応が遅れてくれる。そのタイムラグを利用して彼の手を引けばいい。狙いを定めたらあとは勢いをつけるだけ。ロケットは僕を軌道に乗せて加速する。目標まで五メートル。三メートル。二メートル。

そして残り一メートルというところで見えない壁に弾き返された。バランスを失ったロケットは螺旋を描いて僕を地上へ引きずり降ろそうとする。安全装置？ 違う、神の邪魔が入ったのだ。その証拠に、視界の端で揺らめく『約束の場所』から、奴は別れを告げるみたいに手を振っている。

僕が必死で体勢を立て直している間に彼は神から差し出された手を迷うことなく取った。顔には満面の笑みが浮かんでいた。次の瞬間神が高らかに祝福の詞を唄い、彼の姿が七色に染め上げられ、ガムランを思わせる音が鳴り響き、最後にシャッターを下ろす要領で全てがかき消

された。後には何も残らなかった。

ロケットに再度火を入れ、人気のなくなった夜空で下降体勢に入る。叫び声を上げたい気分だったけど、喉から出て来るのはかすれた泣き声だけだった。どこからともなく流れ出した涙がゴーグルにたまって視界を揺らした。

家の庭に降り立つまでにどれだけの時間がかかったのかは分からない。体は鉛みたいにく、地面に足がついた瞬間ロケットを支え切ることも出来ないままぬかるんだ芝生に倒れ込んだ。それから僕はずっとぬかるみに顔をつけて泣き続けた。ずれたゴーグルの隙間から涙が流れて泥と交わる。息をする度、口の中に雨粒が飛び込んでくる。巨大な水たまりと化した庭土を、僕は盲滅法に叩く。飛び散った泥が更にかかってみじめさに拍車をかける。

親が異変に気付いて助け起こしてくれるまで、僕はずっと暗闇に突っ伏し自分を責めていた。

ロケットと身一つで神に対抗できると思っていた自分。蟲を払う程度の力で跳ね飛ばした神。僕を一度も振り返らなかった心身障害者の男。

僕は結局何一つ出来ない無力な子供だった。

## 六

雨が降った翌朝から三日間、高熱を出して寝込んだ。僕がうなされているベッドの脇で如月はひたすら怒り続けていた。こういう時の如月は容赦というものが欠片すらない。どんな言い訳をしても、事実を一つ残らず打ち明けても決して許してくれない。火山が噴火するような感じだ。火山は一度噴火を始めたなら気が済むまで噴火をやめたりしない。祈りを捧げようと化学物質を投下しようと、こちらの都合なんか無視し続ける。

「大分ましになってきたみたい」

「そう」

「如月も林檎食べれば？」

「いらないわ」

「テスト近いし、帰って勉強した方が」

「いいえ、ここにいます」

「如月ー」

如月は感情を抑えた目で僕を見、静かに低い声で言う。

「風邪ひかないでって言ったよね」

「風邪じゃなくて、熱出しただけなんだけど」僕は何十回目かの言い訳を返す。すると如月の目が細められて、しなやかな手が不穏な動きで僕の額に伸びる。三日洗っていない前髪をかき上げ、露になった額を彼女のそれに軽くつける。

「まだ熱いわ」

「もう大丈夫だよ。明日から学校も行くし。あ、お風呂入らないと」

「いいえ、まだ駄目。ちゃんと下がり切るまで許さない」

「いや、でも」

「でもじゃないわ」突然如月の声が高く大きくなる。「私、ずっと窓からあなたのこと見てたのよ。雨が降ってきたのに下りなかったことも、それから上のロケットに近づいて跳ね飛ばされたことも全部知ってるんだから。何であんなことしたの？ 神なんかどうだっていいっていつも言ってたじゃない。私だって神も『約束の場所』もどうだっていい。睦月にも関わって欲しくない。熱だけで済んだからまだ良かったけど、これでもし私みたいに事故を起こしたらどうするつもりだったの？ 腕をなくす苦しみがどれだけのものか睦月は知ってるの？ 睦月まで私みたいになって、空を飛べなくなったら今まで重ねてきた時間だって辛い思い出に変わっちゃうかもしれないの、わかってる？」

立て続けにそう言っただけで目尻に涙を浮かべる如月は、いつもより一回り小さく見える。そんな彼女を見ていると僕まで泣けてきそうになるから敢えて目線を天井に逸らし、深呼吸を三回。本当は手を伸ばして涙を拭いたかったけど、払いのけられて気まづくなったら嫌だからやめておいて、代わりに口を開く。

「わかってないから飛んだ」

如月の息を飲む様子が、気配で感じとれた。

「ごめん。もうしない」

「……ごめんなさい」

「どうして如月が謝るの？」

「私、最近睦月に我がままばかり言ってるね」

「怒られるのは昔からだから」

如月は小さく苦笑した。少しは怒りが和らいだろうか。

「先々週の丘でのあれ。あの時から私、思ったことは全部睦月に伝えようって決めたの。そうしないと分からないこともたくさんあるから。でも、慣れてないから何だか全部我がままに思えてきちゃって、睦月がどう感じているのかすごく気になってた」

僕は少しためらってから答えた。

「もっと我がまま言ってくれていいよ」

「ありがとう」

如月は、今度は優しく笑ってくれた。

「でも、約束を破ったのは別よ」

冷却シートを額に貼ってもらうと、僕は目を閉じて夜のことを思い出す。どうして興味もなはずの『約束の場所』にわざわざ近づいたのか。心身障害者に手を出そうとしたのか。神に

喧嘩を売るような真似をしてしまったのか。勝てるわけがないことは分かっていたはずだというのに。

多分僕は、神と『約束の場所』に一矢報いることで如月の敵討ちをしようと思論んでいたのだと思う。如月が不具になった大元の原因はそこにあるという確信が心のどこかでくすぶり続けていたのは事実だし、個人的に仕返しをする権利が自分にはあるともずっと思い込んでいた。それで、神を倒すことはできないまでも何かしら邪魔をしてやろうと、幼児みtainな思考で夜空に向かったのだ。如月に心配をかけてまで。

結果がこれでは如月に合わせる顔がない。情けなくて本当のことも告げられない。

「睦月、私の腕のことなんか気にしないでね」如月が、僕の心を見透かしたかのように言う。声音にさつきまでの震えはなく、落ち着いて淡い、いつもの調子に戻っている。「あれはたまだったの。誰のせいでもないし、誰のためでもない。世界のどこかで起きてしまう事故だった。それがたまたま私の所に来ただけ」

「そんなのって」

「いいの」

そう言うと、如月は僕の上に身体を預けてきた。頬が触れて熱が伝わり、僕の身体に火をとます。

「たくさん辛い思いもしたけど、ずっと睦月が守ってくれたから、いいの。もし私に何もなかったら、こんなに大切にしてもらえなかったかもしれないもの。きっと睦月だって――」

「馬鹿なこと言うなよ」

無理矢理起き上がり重さの残る両腕を布団から出して、如月の折れそうな背中を思い切り抱きしめた。そうしたら、如月と一つになって、全てが頭の中に流れ込んで来るような気がした。諦めることで封印してきた希望、ぬぐい去れない劣等感、決して水面に浮かばない卑屈さ、そして僕への想い、何重にも絡み合った糸が一気にほどけて、儂い一本一本が流れ星みたいに僕の胸を突き抜けて行くようだった。

「僕がそんな、変わるわけないだろ」

気付けば僕は泣いていた。あの夜の無力感とは違う、悲しみとも怒りとも愛しさともつかない感情を込めて、肩を震わせ涙をこぼしていた。

「如月がどんな目にあったって」声が弾けるのが分かる。「何が起きたって絶対、変わらないよ。ずっと大切に、大事にするし」鼻が詰まって上手く言葉が出て来ない。「今までだって、これからだって、一緒にいるから」僕は必死に絞り出した。「だから、そんなこと考えないでよ」涙が如月の髪に触れて、雨上がりの葉のようにしめやかな流れを作る。「一生守るから。一人で悲しまないでよ」

如月は震えながら、わずかに頷いた。口を開けかけては何かを飲み込むように閉じる。伝えたいことを言葉にできないような仕草だった。何度かそれが繰り返されてから、ようやく顔を

上げ、涙に濡れた唇を僕の額につけ、消え入りそうな声で一言だけ言った。

「今まで、ごめんね」

僕は謝って欲しく何かなかったけど、今の彼女の精一杯が詰まっていたから、我慢して再び抱き寄せた。如月は力を抜いて、耳元に顔を寄せてくる。そして何かつぶやくように唇を動かした。その言葉が何だったのか、僕は今でも分からない。

「つまりは上手く行ってるってわけだ」

「上手く行ってるって言うのかな、こういうの」

「私にゃのろけ話にしか聞えないんだがね」そう言って先生はマグカップに口をつけた。

「別にのろけてなんかいないよ。どっちかって言えばどうしていいか分からない」

「何も考えなきゃいいんだよ、そういう時は。私はそうやって乗り切ってきた」

「そう言えば、先生結婚してるんだっけ」

「誰も信じちゃくれないがね」

それはそうだろう。研究の虫みたいな先生に奥さんがいるなんて、誰だって信じられるはずがない。おまけに相手が美人と来れば尚更だ。

先生はコーヒーをすすりながら続ける。

「誰だって変化の時期は不安だし未来が恐くなるもんだ。特に恋愛なんてものはね。問題はそこで足踏みするか前向いて一步を踏み出すか、それだけさ。どちらがいいかなんてやってみなきゃ分からない。だったら少しでも勇気を出して前に進んだ方がいい。違うかい？」

「分からないよ」

「素直でけっこう。だけど、あんまり彼女の前で不安がったりするなよ。そんな馬鹿正直さは犬にでも食わせておけばいい」

何だか神妙な気分になって、僕はただ頷いた。先生の言う通りにも思えるし、間違っているかもしれない。でも、先生の言葉が適当さから生まれたものではないことだけは信じられる。だとしたら僕もそれなりの態度で受け止めなければならぬ。

「そりゃそうと、レポート出来た？ ついさつき新型送ったから、入れ替わりで今のやつと送り返して欲しいんだけど」

「レポートは今週中に送れると思う。新しいの、出来たんだ」

「出来ましたよー」先生はどこか誇らしげな顔で椅子に座り直した。「今回は自分で言うのも何だけど力作なんだよ。出力上げて制御系いじってジャイロも……いやまあ届けば分かるくらいいいか。とにかくちよつとばかり画期的なやつだから、実物見て驚いていただきたいもんだね」

「楽しみにしてる」

「ま、今度は雨の日に飛んで熱なんか出さることだね。もう神とかはほっときな」

表情がこわばるのが自分でも分かった。

先生の言っていることは正論だし納得もできる。でも、納得したからと言って消え去ることのない敵愾心があるのも事実だ。如月の事故から始まったその感情は『約束の場所』を巡る一件で胸の底に根付きつつある。それを自分で止めることは出来ないし、ましてや自分以外の誰かがどうこうなんて考えるまでもない。

膝に置いた握りこぶしに力がこもる。神という単語を聞いただけで不快感が喉元にせり上がってくる。

そんな僕を見かねたのか、先生は手元のマグカップに視線を落とした。それからしばしの沈黙を挟んで口を開く。

「神は私も好きじゃない」

僕がはつとして視線を上げると、先生の穏やかな顔があった。

「あれのせいでいらん怪我人や死人が数えきれないくらい出てるし、これからは行方不明者だっけで増えるだろう。資本も天文学的な数字がここ三十年で無駄に浪費された。政府にしてみれば『約束の場所』がなかったらどれだけ他の大事なことにリソースを割けるかってとこさ。宇宙にロケットを飛ばすことだっけで出来たかも知れない」

「だったらー」

「それでも、だ。神にこだわっちゃいけない。あれは人間とは全く違った論理で動いているんだ。そもそも論理と呼べるですらないかもしれない。だから私達がいくら構おうとしてもそれは水面の月を切ろうとするようなもんで、届くことはないだろう。それなら、私達が生きる条件として飲み込んで行くしかないと思うんだよ。仕方ないって言い方は好きじゃないが、神をいちいち睨んだって馬鹿な政府と変わらないじゃないか」

「そうだけど、実際神を見たらどうしようもないと思う」僕はうつむく。

「如月ちゃんのことを考えな」

「如月？」

「そう。彼女と神とどっちが大事か」

「如月に決まってる」

「ならいいじゃないか。危なくなったら彼女を思い出せばいい。そうすりゃ我慢できる。私はそういうやり方で通して来たね」

僕は髪をかきあげ、大きく息を吸った。少しだけ世界が大人しく見える。

「出来るかどうか分からないけど、やってみるよ」

「出来るさ」先生は確信ありげに笑って言う。「それより、今度如月ちゃんも連れて来なさって。君と来たら、一度として会わせようと思わないんだから」

家から町外れの丘までは一キロ程度、徒歩で十分と少しかかる。重いロケットをかついで歩くにはきつい距離だし警察に見つかったら言い訳に困るから、僕はいつも段ボールにロケットを隠しカートに乗せて行く。今日届いたばかりの新型は出力を上げたせいサイズも重量も二割ほど増していて、引きずるだけでも体力を使う。

上空を合法ロケットが行き交う中、忍び足で路地を抜け、斜面に差し掛かる辺りから僕の歩みは自然と早くなる。まだ時間に余裕はあるけど何となく気が急いで止まらない。一瞬でも早く如月の顔が見たい。新しい翼を見てもraitたい。そう思うだけでカートを引く手と二本の足に力がこもる。

時刻は十時を回った頃だろうか。森の中にぼっかり空いた平坦な草地に辿り着き、ためていた息をまとめて吐き出した。それに呼応して額と背中を細かな汗が流れ落ちる。町の方からは相変わらずエンジン音が吹き寄せてくる。

如月はレジャーシートの上に毛布を重ね、夜の木々より静かに眠っていた。首元まで引き上げたコートの襟に右手を添えた格好で身じろぎ一つしない。規則正しく上下する肩を除けば、精巧に作られた美術品のようにも見える。

僕はその何とも表現し難い寝姿に少し見とれてから、間違えて起こさないよう慎重にカートを横たわらせ、段ボールの縄を解いてやる。蓋を開け中の暗闇に目を凝らすと、おろしたての機体が輪郭を露にする。大ぶりの二筒のロケットエンジンに、長くとられたハーネス。わずかに残った油の匂いが土や木や草のそれと混じって心地良い。

仕様書は何度も読み返した。先生から直々に注意も受けた。それでも世界初の機体だと思いと不安が頭をよぎる。緊張で操縦ミスを起こさないか。うまくバランスをとれるのか。事故は決して許されない。何年も意識し続けて来た事が、途端に難しく感じられる。

「睦月？」と、背後から眠たげな声。一瞬身体が硬直して、それから不自然な動きで如月を振り返る。

「ごめん、起こしちゃった？」

「何となく、起きたの」

そう言いながら上半身を起こす。

「起きない方が良かった？」

僕は軽く首を振る。

「でも、もう少し寝ていてもいいよ。まだ十一時まで大分ある」

そして、いつも如月がしてくれるように口笛を吹き始める。彼女ほど上手にメロディを奏でることは出来ないけど、耳障りではないと思う。

如月は微笑して再び横になる。視線を町に落とし、次いで草むらに座り込んだ僕の胸元へ。

口笛はやがて夜空にかき消えて、沈黙がその後を継ぐ。

僕は操縦桿や燃料をチェックしつつ、何度も空を思い描く。そうしたところで不安は消えてくれないけれど。

心臓が千数百回鼓動を打った頃、終わりの鐘が鳴らされた。その音を聞いたロケットピープルが一人また一人、地上に降りて行く。その様子をひとしきり眺めてから、僕は自分のロケットに手を掛け目をつむる。後で如月が起き上がり、ゆっくり近づいて来る。

僕の脇に寄り添ってしゃがみ込んだ彼女は、そっと手を重ね、奥行きのある声で言った。

「睦月、恐がらないで。私まで心配になっちゃうわ」

その一言で不安が溶け落ちる。

「ああ、うん。分かった。……大丈夫」

安心を誘う笑み。彼女に見通せない事は何一つないのだと、今更ながら思い知らされる。

もう夜空に人影はない。頃合いだ。

「じゃ、行くよ」

そう言っつてロケットを背負い、予想以上の重さに少しふらつきつつ如月の手をとって引き寄せる。彼女はそのまま僕に背中を預け、軽く身体を弛緩させる。

そのあと少し考えるような仕草してから唐突に身体を反転させて僕の首に抱きついた。

「あの、如月？ 向きが逆なんですけど」

「だって、こうしないと睦月の顔が見えないわ。それにきつと、この方が怖くない」

鼻先が触れそうな距離で悪戯っぽい笑みを浮かべる如月に何も返せず、黙ってハーネスを取り付ける。腰の辺りをきつく締めると色んな感触が強まって、顔に火が入る。ずっと前から望んできたことなのに、いざ現実になってみると、ちよつと困る。

悪戦苦闘すること五分、ようやく二人分の身体をロケットに括り終えて大きく息を吐いた。

あとは先生の計算ミスがなければ大丈夫なはず。

「さて」と僕はつぶやいた。「怖くない？」

「少し怖いな。何年も飛んでいないから。でも、睦月が守ってくれるでしょう？」

「もちろん」

微かに汗の残る手を一度だけ拭いて、操縦桿を握り込む。すると二筒のロケットは待ちかねたように短い炎を生み、僕達を地上から切り離れた。

サイレンサーは完璧、炎はターボライターよりも小さくて暗い。だというのにエンジンの氣勢は高く、以前の二倍近い体重をもとせせず空へ運んで行く。僕の首に回された右腕が時々こわばり、水面下に潜む恐怖を伝えて来る。僕はその揺らぎに一石を投じるべく如月の腰に手を回す。これまでと違うのは二人とも同じだ。

十分な高度に達してから四天川を避けて市庁舎近くに移動し、ホバリングに切り替える。眼下に町を一望出来る丁度良い位置取りだ。家々は半分以上灯を消しているけど市庁舎の時計塔は夜通しライトアップされていて、闇に浮かぶ灯台を思わせる。

「時計塔、変わらないね」如月がつぶやく。「初めて飛んだ時と同じ」

「僕達は変わって行くのにね」

如月の身体からためらいが消えたのを感じ取り、遊覧飛行に移る。町を縁取る形で楕円を描きつつ山脈方面へ。四天川をなぞり丘を見下ろし再び町の中心部に向かう。冬枯れの風は冷たく、如月の頬は温かい。

更に高度を上げると、例によって『約束の場所』が見えてくる。神も健在のようで無邪気な手招きを僕達によこす。僕は再びホバリングに入り操縦桿で空の風穴を指した。

「あれ、『約束の場所』。見える？」

「うん。思ったより小さいね」

「精一杯なんだ」

「如月は楽しげに笑った。

小指の先ほど芽生えかけた黒い感情を如月への想いで塗りつぶす。思ったより簡単だった。先生の言った通り、神なんて二人でいれば気にもならない。

『約束の場所』は、無視していたらすぐに見えなくなった。彼もいい加減諦め気味と悟ったのかもしれない。

「しっかりとかまって」と前置きして、操縦桿を最大限に引き絞る。小さな悲鳴。一方で緩められる右腕。如月は半身になって行く先を見据える。僕は慣性と重力と液体燃料の力を総動員して空を駆け上がり、滑り、降下する。限りなく黒に近い炎が描く二つの台形は、如月が見つけた青い蝶。

「誰か写真にしてくれないかしら」と、如月。声音がいつになくはしゃいでいる。

「先生ならやってくれるかも」僕は山脈の麓を指す。

大学のキャンパスから、前世代のステルスロケットを背負った人影が上昇を始めていた。

「あの人、先生？」

「うん、多分。大学から飛ぶなんて、大丈夫かな」

「でもきつと楽しいわ」

「そうかもしれない。

先生のロケットはぎこちない動きで近づいてくる。僕はわざとかわすようにして、丘に揃った樹冠を撫で、そのまま薄雲の近くまで上昇する。

下弦の月に照らされた如月は、僕の顔を残された右手と幻の左手で引き寄せ、小鳥みたいなキスをした。

先生は時計塔の上を旋回する。

僕と如月は微笑みを交わす。

彼が放つ群青色の炎。

生まれたばかりの見えない炎。

神すら消えた真夜中に、僕達の色はよく映える。